論文審査及び最終試験又は学力の確認の結果の要旨

㊀・乙	氏　名	祝原　あゆみ
学　位　論　文　名	At-risk Internet Addiction and Related Factors among Junior High School Teachers － Based on Nationwide Cross-Sectional Study in Japan	
学位論文審査委員	主　査 副　査 副　査	津本　周作　印 稲垣　正俊　印 藤谷　昌司　印

＜論文審査の結果の要旨＞

インターネットは急速な普及をみせており、その依存状態が問題となっている。わが国の教育現場ではICTを活用した教育が推進され、教員がインターネットを使用する必要に迫られている。申請者は中学校教員を対象とした全国調査を行い、at-risk Internet Addiction (IA)の頻度とその関連要因について研究を行った。調査対象者は、無作為抽出した全国の中学校140校に所属する教員3,326人とし、有効回答1,696人(有効回答率51.0%)を分析に用いた。無記名自記式質問紙による調査を行った。調査項目は基本属性、インターネット使用状況、Internet Addiction Test (IAT)によるat-risk IAの評価、Japanese Burnout Scaleを用いたBurnout Syndrome (BOS)の状態とした。at-risk IA 群は、IATスコア40点以上とした。BOSは、3つの下位因子ごとにそれぞれ四分位に区分した。分析は、at-risk IA群とnon IA群の各項目の2群間比較を行った。また、BOSの各下位因子の四分位群とIAの平均値の関連をANOVAとANCOVAにて検討した。さらに、多変量解析を用いてat-risk IA群に対する各独立変数の寄与を算出した。

全国の中学校教員においてat-risk IA群は、96人（5.7%）であった。at-risk IA群は、私的目的でのインターネットの60分間以上の利用、ネットサーフィンやゲームの利用と、正の関連がみられた。これらの要因を調整した上で、at-risk IA群とBOSの下位因子のひとつである「脱人格化」とは正の関連を、「個人的達成感の低下」とは負の関連を示した。

以上から、本研究は、新しい時代の課題であるat-risk IAにおいて、わが国の中学校教員のインターネット使用状況やBOSの下位因子の寄与を全国規模で明らかにした点で、意義のある研究である。「脱人格化」の早期発見を行うことで、at-risk IAを予防できる可能性があることが示唆された。

＜最終試験又は学力の確認の結果の要旨＞

申請者らは，統計解析を用い，全国規模で収集したデータからat-risk IA群の特徴を描出するとともに，本群に到るリスク因子を同定した。特に，ゲーム使用だけではなく，漫然としたインターネットサーフィンもリスク因子となりうること，脱人格化が注目すべき因子であることを明らかにした。深い知識に裏打ちされた研究内容であるとともに関連知識も豊富であり，博士の学位授与に値すると判断した。（主査　津本周作）

インターネットの普及に伴う新たな問題であるインターネット依存について、教師において関連要因を探索した。全国規模の調査で、その研究方法・結果の考察も適切であり、問題の背景やその後の研究進捗の必要性も十分に理解されており、その成果は博士の学位に値すると判断される。（副査　稲垣正俊）

申請者は、中学校教員における、インターネット依存リスク状態(at risk IA)とバーンアウト症候群(BOS)について着目し研究を行った。全国規模のアンケート調査により、インターネット使用状況やIATスコアが高いものほどBOSの下位因子として、脱人格化が高いことを見いだした。研究は先駆的で、プレゼンテーションは明瞭、基礎的な周辺知識も豊富であり、博士の学位授与に値すると判断した。（副査　藤谷昌司）